



VOL 72

発行 2021 年 1 月 10 日
公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
URL ● www.jac.or.jp/doukoukai

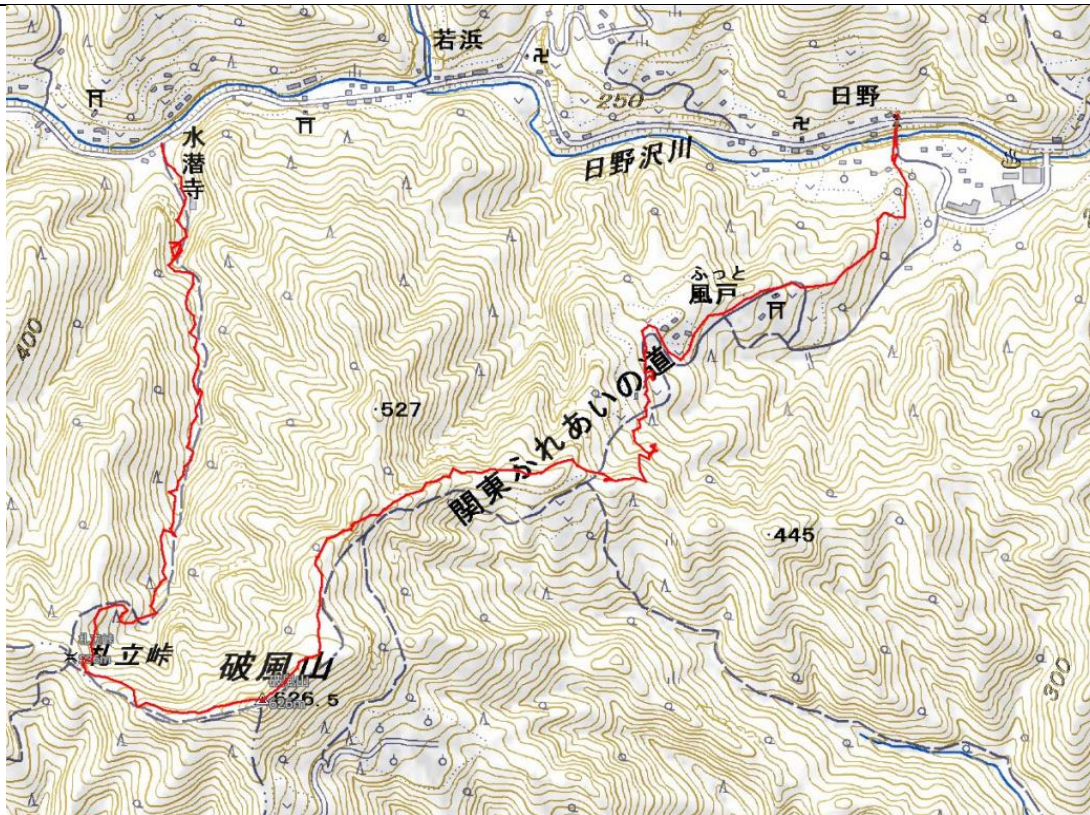
山行報告 「関東ふれあいの道」GPS 山行 埼玉⑧

秩父盆地を眺める道

2020年10月18日(日) 晴

参加者: 今井、鎌田、大西、棚橋、木村、L渡辺(敬称略、計6名):

コースと時間記録: 秩父鉄道皆野10:21着10:28発~10:48着札所前(日野沢行きバス)10:52~(1:02)~11:54札立峠12:04~(0:16)~12:20破風山(昼食)13:00~(0:40)~13:40野巻への分岐~(0:15)~13:55風戸部落上の東屋14:05~(0:25)~14:30 風戸入口バス停(実総走行時間:2.5時間、実走行距離:4.8km)



報告1

秩父盆地を眺める道・木村 樹美雄



10月17日(土)天気は晴れ、快晴とまではいかないが暑くもなく寒くもなく、山行にはもってこいの天候かも?という事で集合場所の皆野駅からバスに乗車、カーブの多い道をバスに揺られること25分程、札所前にて下車。身支度を整え、34番札所の水潜寺から破風山に向かっ

て登山開始(10:55)。木立の中、ゆるやかな登りが続く。左手に川が流れ、せせらぎの音を聞きながら登っていくが、石がゴロゴロとしていてところどころで滑って、足をすくわれ歩きにくい。25分程の登ると川は右手に変わる。昨日の雨にもかかわらず、水はとても綺麗で流れも速い。川のせせらぎの音を聞きながら、ところどころで小休憩をとり登ること約1時間30分、破風山に到着(12:20)。この間、木立に遮られ景観はほとんどないが、さわやかな空気が心地よい。

破風山の山頂では急に視界が開け、360度の大展望。眼下に秩父の街並み、正面には武甲山がそびえ、見晴らし最高、想像以上に素晴らしい景観である。さして広くない山頂だがシートを広げ昼食をとるには十分の広さだ。

昼食を終え、風戸入口に向かって下山開始。緩やかな下りで登りの時と違い、落ち葉を踏みしめながらの下山で歩きやすい。5分



程で1つ目のあずま屋に到着。ここから6分程急な下りが続くが、その後は緩やかな下りとなる。猿石を過ぎ、1時間程で2つ目のあずま屋に到着。ここまですれば風戸入口まではほんのわずかである。下りも木立の中で、景観はほとんどなく黙々と下るだけだったが、全体的全体に気分は爽やかである。

* * * * *

風戸入口着が2時30分。時間の余裕もあり当初予定をしていた萬願寺温泉で汗を流すことにする。下山後の温泉は最高、とても気持ちが良い。のんびり湯につかり、露天風呂の脇を流れる溪流の音を聞きながら、疲れた体を休める。至福の時間かもしれない。

さっぱりしたところで秩父駅に向かい、駅前のらーめん屋で今回の反省会しながら、次回の山行日程等を決め、今回の山行は終了である。

私、個人の感想としてコロナの状況下、天候にも恵まれ、走行時間も程よく、眺望もよく、久々の山行で足慣らしをするのには、とても良かったと思えた。また全員、ケガもなく無時に下山できた事に感謝の一言である。

報告2

秩父盆地を眺める道・渡辺 真一



SUICA やPASMO が使えない超ローカルな秩父鉄道皆野駅に6名が集合、100m程離れたバス停に移動する。2月に宝登山から長瀬に行ったときには金沢行きバスに乗り根古屋橋で下車したが、今回は根古屋橋を通り過ぎて反対方向に向かう。その日野沢行き町営バスは5分ほど遅れてやってきた。全員は座れず20分ほど立ったまま揺られて、札所前に時間通り到着した。

この札所、水潜寺は秩父34霊場、日本百観音霊場(西国・東・秩父)として、巡礼者が打ち留めの札と笈摺(おいずり)を納める寺であるそう。その水潜寺の脇の湿っ



写真A



た沢沿いの道を進み、一汗かいたところでようやく札立峠に到着。昔の人はこの峠を越えて巡礼を行ったことが峠の看板に記されていた。

札立峠から破風山は直ぐだった。そして

その山頂には思いがけない景色が待っていた。武甲山を背景に奥には秩父の街並みが見え、眼下には荒川沿いに皆野から長瀬への街並みが広がっていたのだ。さすが皆野アルプスと称されるだけのことはある。写真Aで左手正面の丸くぽっこりした山は蓑山(美の山584m)、その右奥の小高い山が大霧山(766m)。両方とも関東ふれあいの道で登らねばならない山達だ。写真Bでは左端が丸山(960m)、双耳峰の双子山(882m)、そして武川岳(1051m)、武甲山(1295m)と続く。そんな景色を眺めつつ昼食を取った。



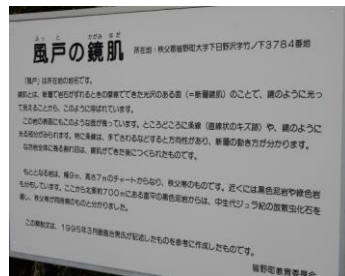
写真B



下りはなだらかな稜線歩き。あまり景色は見えなかったが、皆野アルプスの南側はすっぱり切れているのでよそ見をしていたら、あっという間に崖下へ転落してしまうだろう。やがて、道は風戸部落へと北に方向を変える。部落の上に気持ちの良さそうな東屋があったので一休み。大西さんは目の前の柿の実に心を動かされ、ひとかけらを口に。結果は推して知るべし。さらに道を進むと大粒の銀杏が所狭しと落ちているではないか。皆で銀杏拾い。しかし、一人が中途半端な袋に入れたため、この後、その匂いがどこまでも付いてくることになった。この銀杏は、帰ってから処理をして乾かし食してみると実に美味かった。新鮮な山の土産はやはり格別だ。



風戸部落の道端に大きな岩があり、そばに「風戸の鏡肌」と呼ばれているとの面白い看板を見つけた。実物の写真を取り損ねたのは失策だったが、鏡のようにつるつるした岩肌だった。看板に記されているように、岩と岩が



こすられてこれだけ
つるつるの表面がで
きたらしい。

そこから温泉までは直ぐだった。しかし、目当ての町営温泉は閉鎖されており、倍高い「満願の湯」に入るようになった。結構、

混んでいて少々心配だったが、PH9.3 という高アルカリ性の温泉は、肌につるつるで湯あたりが快適だった。久々の山行の後に、温泉、そして風呂上がりには冷たい生ビールは最高だった。満願という名前から、潜水寺で巡礼を終え、満願が叶う温泉だからつけられたのかと思ったら、どうもそうではないらしい。温泉そのものは水潜寺の麓からわき出ているらしいが、満願の湯HPによると「時は天長元年(824年)に大干ばつに見舞われた際、五穀は勿論、人畜、草木に至るまで助かるべき法は手を尽くし、人は天に向いて祈らばその丈6 尺余りの法師現れ、杖を持ち岩を突くとたちまち、水湧出、その様は滝の如くと云われた。」(不亭応賀誌より)「必ず願いが満つる」すなわち満願である、とのこと。

直ぐそばの温泉前というバス停からバスで皆野駅に出て秩父鉄道でお花畑へ。西武秩父駅前のラーメン屋で反省会を持ことに。そして、締めはラーメン屋の店主が何故か大いに勧める日本ソバで終えたのであった。

* * * * *

新シリーズ 分水嶺を越える県境・市町村境

—越境する山と溪— (1) 尾瀬

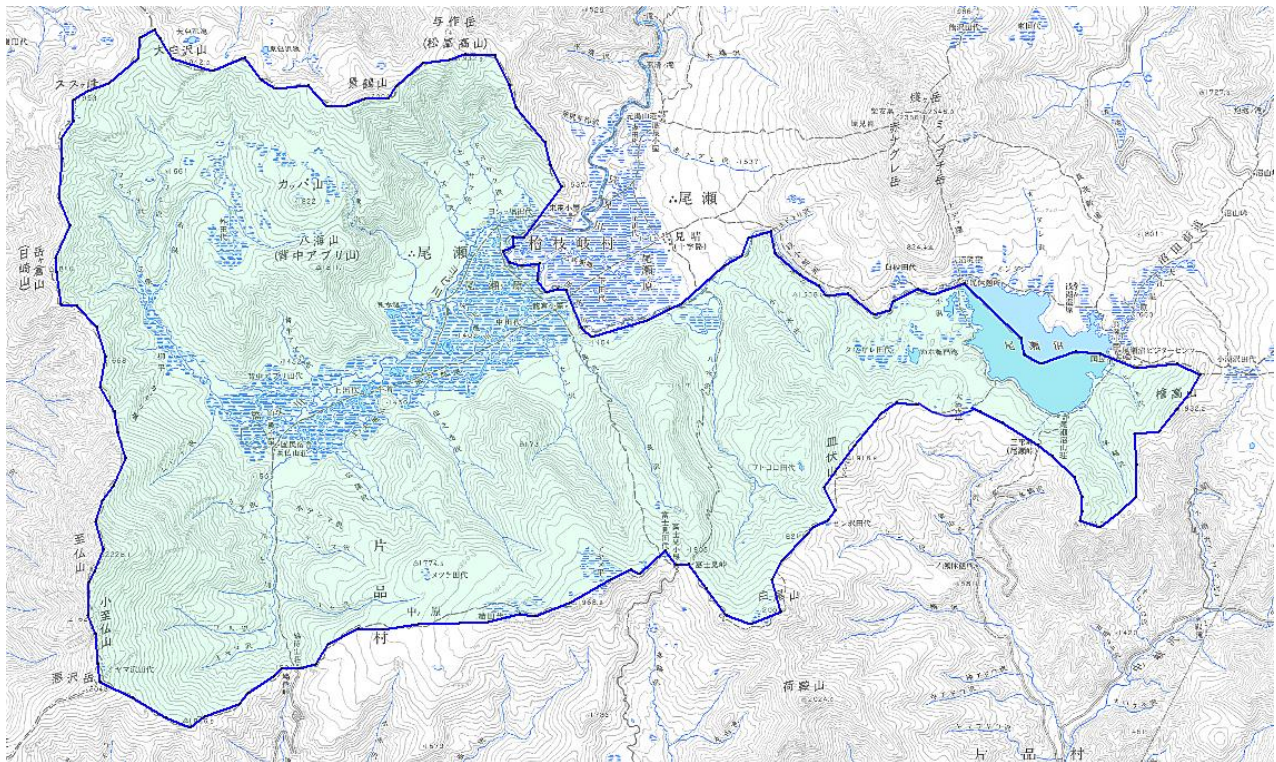
富永 滋

分水嶺を越えて広がる県や市町村の区域。かなり特殊な地形が想像されるが、そこにあるのは意外とよく知られた山や溪である。どのような経緯で県や市町村の区域が分水嶺を越えたのか、その興味深い理由を探ってみたい。

大半が群馬県に属する尾瀬の水は、只見川を通じて日本海に注ぐ。関東平野の一角を占める群馬県は太平洋側との印象が強いが、尾瀬や野反湖など、日本海側の区域も抱えている。只見川は、源流の尾瀬において沼尻川と名を変えるが、その左岸の全ては群馬県に属する。尾瀬沼の中心より南側と、尾瀬ヶ原の西寄りの半分以上が群馬県片品村であり、尾瀬沼の北半分と、燧

ヶ岳、尾瀬ヶ原東端の見晴十字路口付近が福島県檜枝岐村、東電小屋一帯の僅かな地域が新潟県魚沼市(旧湯之谷村)となっている。

中央分水嶺を越えた県境の越境は、極めて中途半端な位置で始まっていて、小淵沢田代の西約 500m の 1911 独標がその始点である。県境は日本海水系に向けてカマホリ沢を尾瀬沼に下り、長蔵小屋の南から尾瀬沼の中心を横断、沼尻川に沿って尾瀬ヶ原に至る。沼尻川がヨッピ川(只見川本流)に出合うと「尾瀬崎」三等三角点(1537.9m)、与作岳と駆け上る。景鶴山、大白沢山と堂々たる支稜を通るあたりは、激しいヤブ山である。水長沢の支流文珠沢源頭の 1911 独標肩で中央分水嶺に出合い、越境が終了する。



ここから県境は暫く中央分水嶺を辿る。ススケ峰、日崎山は相変わらずのヤブ山で、至仏山から悪沢岳までの 2km 弱は一般登山道になっている。悪沢岳で県境と中央分水嶺とが一致する区間が終わる。悪沢岳から始点へと中央分水嶺を辿る道筋は、言うまでもなく県境ではない。

鳩待峠、アヤメ平、富士見峠、皿伏山と通り、尾瀬沼直前の大清水平まで、厳密に分水嶺上ではないが、概ね沿って登山道が付いている。喧騒の鳩待峠が分水界とは、地形図をしっかりと見ないとなかなか気づかないものだ。中央分水嶺は大清水平で一般登山道を離れ、三平峠、檜高山を通り、始点の 1911 独標に戻る。越境区域の面積は約 63.31 平方 km である。

現在の県境は、正保元年(1644 年)の正保国絵図とほぼ一致し、少なくとも江戸時代にはすでに尾瀬は上州国の一部であった。正確には、尾瀬沼から大江川左岸の沼山峠までが上州であり、国境は沼山峠から尾根伝いに大江川を通り現在の県境に接続していたことが、利根郡土出村(現片品村)と会津領檜枝岐村との取り決め文書に記されていて[1]、尾瀬の歴史を詳しく論じた木暮理太郎もそれを指摘している[2]。尾瀬沼は正保図では「さかひ沼」とされ、当時から国境は沼の中央を通っていた。

尾瀬は会津側の檜枝岐から見ても、旧会津国内の檜枝岐川の分水嶺を越えた地であった。水系的には只見川分にあったが、余りにも山深い只見川流域は、鉾山集落の銀山平を除けば、遥か下流、六十里越入口の田子倉が最後の集落であった。銀山平付近の袖沢から大津岐川までは佐梨川の芋川、宇津野、折立、大湯の各村の持ち分で各村の作り小屋が点在していたが[3]、

本村から遠く只見川が陰しさを増す上流の尾瀬側には権益が及ぶ余地がなかったようだ。

片品村から尾瀬沼を通して檜枝岐へ通ずる道は、会津街道(沼田街道)と呼ばれる裏街道である。伝説によれば、嘉禄元年(1225 年)、敗走中の藤原頼実が尾瀬で病に倒れ埋葬されたとされる。悲話として単純化されたこの説が最も流布しているが、通った経路や終焉の地など諸説あるようだ。これら歴史の詳細については、木暮の研究を参照されたい[2]。いずれにせよ、この道が古来から存在したのは確からしい。江戸時代には、片品と檜枝岐の間で交易が行われ、湖畔に取引小屋が置かれていた。地形的には両村の間に三平峠、沼山峠の二つの小さな峠があり、その間に尾瀬沼が位置するので、ここに国境が置かれたのは自然なことであろう。元々周辺各村の山稼ぎ場であった尾瀬は、明治三十年頃私有地となつたらしく[2]、そのことが後の尾瀬ダム化問題の発端となるわけである。電源開発と自然保護とのせめぎ合いは昭和四十一年の尾瀬原ダム計画凍結で一息ついたものの、最終的な収束を見るには平成八年の東電による水利権放棄を待たねばならなかった。

次回は ―越境する山と溪―(2)野反湖―

AGC レポート vol-72 2021 年 1 月 10 日発行
発行: 公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会 気付
TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
編集担当: 近藤 E-mail: yoshi-kondo@com.home.ne